



＊ 報 會 樹 葉 針 ＊

號 八 十 九 第 卷 通

大平峠と權兵衛峠

べん

木曾三留野と伊奈飯田をつなぐ大平峠。四十七軒を走る自動車道路も冬の間は一米餘の積雪に被はれてバスも通らぬと云ふ話を聞いて行つて見る氣になつた。

二月十四日(土) 午後一時四十分名古屋發。月曜日も一日休むつもりで、連れもない一人旅。四時半三留野下車。冷い風がビューと山峽を吹き過ぎる驛前に立つて聞けば大平峠の下、大山までバスが入ると云ふ。六時迄待つてバスに乗込むと日暮の街道を妻籠、^{ツマゴ}關^{アラキ}と走つて大山に着いたのが暗くなつた七時過。道を少し登つて鈴木屋と云ふ荒物屋兼業の宿に入る。十五日朝は雪が降つてゐた。八時二十分出發。バス道を避けて近道をスキーをかついでグングン上つて、地圖の道が一度大きく西へ向いてそれからグツと曲つて峠へ向つて東へ伸びる角が木曾見茶屋と云つて其處でスキーをつける。それから小一時間も行くと大平峠に出る。

十時半。

振りかへる木曾の方は木立をかすめてまだ小雪がチラついてゐるが、東、伊那の空は明るい。自動車道の下りは半分歩いてゐる様なものだが、落葉松の林を抜けて行くのは心楽しい。十一時半大平の静かな村に着いて、とある家の爐端に上りこんで晝食をとる。一時間許り話こんでまた雪もよひの空の下に出かける。今度はシェルをつけて飯田峠までの軽い上り。飯田峠からの伊那盆地の眺めは美しい。向ふの山は南アルプスの端か、雲にかくれてゐるが、時々晴れ間に眞白な頭が雲合から見える。天龍川の流域は晴れ渡つて薄青い靄の様な仄かな色合だ。

バス道はそれでも大平の下りよりは面白い。一ノ瀬橋まで来た時はスツ

カリ晴れて、今度は雪が重くなり出した。それでも四時近く、陽がかけり出すと雪が固くなつて、面白い位スピードが出て、傾斜は大したことはないが一直線に飯田の町に滑り込んだ時は、今日一日の有終の美であつたらう。スキーを脱いで五分も歩いたら驛に出た。一時間ばかり待つて五時五十分飯田發、寒い電車の中でふるへながら伊那町に着いたのが七時半。驛前の宿に泊る。

十六日、晴。玄關でロックスを塗つてゐたら、宿の人が昨日シソガポール陥落の發表があつたと教へてくれる。

八時、スキーを小脇にかゝへて伊那の町に出たら祝賀の國旗が軒毎に翻つてゐた。ふり返るさ甲斐駒が東に高く、南に木曾駒が雪煙を青空に白く上げてゐた。地圖の權兵衛街道は通らず、小澤、平澤の村々をスキーを肩に、踏み固めた雪路に落す旗の影に日の本に生れた喜びを胸一ぱい抱いて通り過ぎる。北澤で少し早いが晝食にして十一時半權兵衛峠上り口と記された道標に出る。此處からスキーをつけて七曲りにかゝる。登るにつれて駒を真中に右に白峰鹽見、左に八ヶ岳と次々に出て来るのを楽しみに段々上つて行く。上りきると一軒家へ出て南斜面となつて雪が消える。

又、スキーをかついで桑の畑を過ぎると、南向の日溜りは暖かで、スキーに當つてビュンと弾く桑の枝々も、柔軟な春の響がする。

今時分スキーを背負つてこの街道を歩く酔狂な男があらうとは權兵衛さんも夢にも思はなかつたらう等と考へながら、ノンビリ好い氣持になつて行つたら、餘りよく踏まれた道に思はず川を右

岸に渡つて行つて、變に思つて高い處からと來た對岸を見たら立派な峠道が向ふに走つてゐる。炭焼道に迷ひこんだのだ。慌てて引返した。これで一時間ばかり、時間が遅れた。もこの桑畑に歸つて、松林の中を過ぎると雪が出て來てスキーをはく。一時少し過ぎお爺さんが一人休んでるのに出遇ふ。木曾の方から峠を越して來たのだが、雪にもぐつて思はず暇取つたと云ふ。丁度其處に權兵衛の跡と云ふ石がある。何でも權兵衛さんは木曾の神谷の人さかで、木曾から伊那へ道をつけたのだが、大力無双で、鉄を振つて岩にきりつけた其の跡が三つ、今にもその石に残つてゐる。何時頃の人なのか、昔の話はお爺さんに聞いても分らなかつたが、大平峠が縣道になり自動車を通ずる様になつてから此の峠も淋しくなつたと云ふ今の話を切實に物語つてくれた。三十分許り休んで又一人峠に向ふ。ふり返つては見る南アルプスの展望は申し分なく峠についたのが二時半。流石に一、五二二米の高さ丈けに吹き抜ける風が冷い。峠から菅平までの下りは面白かつた。それから時は時々滑る處もあるが、西や南の陽を受けて雪の消えてゐる處も所々あつた。四時過、羽淵着。姥神峠を越して宮ノ越か藪原へ出るか、このまゝ奈良井へ出た方が好いかと考へたが、草臥れた身に峠越しは御免蒙つて、またスキーを肩に森林軌道の枕木の上を、トコトコ奈良井に向ふ。陽が落ちて柵窪邊では眞暗になつて山峽の夕暮の寒さがヒシヒシと身にしむ中を足を早める。奈良井へ入つたのが丁度七時。古い落着いた宿場の暗い町中を歩けばラザオを通じて東條首相の力強いシンガポール陥落の講演が響いてゐた。

(終)

新羅二郎君より

大變御無沙汰して居ますが御元氣ですか。節分も過ぎ初春が訪れるのも近い事と思ひます。今年の冬山は如何でしたか。自分は二回目の冬を過しそろそろSKIも忘れた様です。幸ひ至極壯健、益々張切つて居ます。内地の厳格な統制経済には種々御苦勞な事と拜察します。現地に居ますお蔭で吾々は何不自由なく暮して居ます。針葉樹會は如何ですか。お體大切に。(林苑)

岩崎利一君より

拜啓 久しく御無沙汰致しました。そちらは春の賑ひで囂華か
でせう。こちらも杏の花が散つて今菜の花盛りです。皆様御元氣
の御事と存じますが、小生も無事軍務に勵んで居りますから何卒
御休心下さい。先は右御挨拶迄 敬具(林苑)

記 録

大嶽山—愛宕山 一月三日

中川孫一、同浩一

新年早々長男を連れて戦勝祈願の初登山を試みた。御嶽驛でバスに乗った登山者は僕等父子唯二人。春、秋のロンサ連が如何に遊山氣分でやつて來てゐるかといふことが實にハッキリとわかつた。全山静寂、快晴、無風、絶好の初登山となつた。愛宕山經由の降路は初コースだつたが、子供の足には相當こたへる。
飯士越(スキー) 一月廿五日 中川孫一外一名

今度で三回目だが、最初ペンチャンに誘導された時は(昭和九年)相當苦勞した今度は鼻唄交りで悠々飛ばした。實に恐るべきはスキー術である。

本社ケ丸 三月廿二日

中川孫一

中央線沿線でワイワイ連の知らない、歸りには樂に汽車に乗れる(註、與瀬、上野原あたりでは終日乗りきれず翌朝歸つた人がある)山はないかと考へて本社ケ丸を選んだ。企畫的中、北側の澤には相當の残雪があつて氣分が出たばかりでなく本社ケ丸頂上からの南ア、八ヶ岳、秩父の眺望はすばらしい。こゝから東走する尾根はぶなの原始林さつゝ、じの群落に蔽はれた強い降りで踏跡は可成はつきりしてゐるし藪も適當に切開かれてゐる。寫眞、罐詰、キャメル等の遺跡の無い點から推察して、ハイカーから取残された桃源郷である。登路は新しい木馬道に尖とつて代られ、しかも其終點からは澤登り、又は藪漕が一時間位續く(註、清八峠道が木馬道に合してゐる地點がハッキリ判らない)ことを覺悟せねばならぬ。降路は地圖には寶銅山から笹子驛への索道に沿ふて道があるやうになつてゐるか、これもあまりハッキリしない。しかし索道に沿ふて澤を二十分ばかり急降するさ澤沿ひに道が現れて來る。それからもう何のさうさもない。

一橋山岳部記録

○追悼碑建設作業(七、九—七、一八) 根本、山田、樫淵、松下、間々田、中林、前田、細野

九日 本科四名先發。富山にて種々交渉す。

十日 豫科、専門部五名出發。

十一日 立山温泉にて合流す。

十二日 雨。五色小屋着。連日の雨に頼みの品一つも上つておらず、相當腐る。

十三日 曇時々雨。追悼碑敷地選定及び土臺の石運びを行ふ。

十四日 晴後曇。午前、砂運び、午後テント建設。

十五日 晴後雨。材料上らず此日一日休憩、N外五名立山に遊びに行く。午後石碑及びセメント到着。

十六日 雨。土臺完成。Y外三名立山温泉に荷物をとり下る。劔澤班、針ノ木班、到着。

十七日 雨後晴。追悼碑完成す。友田家代表二名、常盤部長大塚先輩及び部員宮坂、深谷、林、川村、高野到着

十八日 晴、山に入つて始めての快晴の下、盛大なる除幕式を舉行す。

○燕、槍ヶ岳(七、九一七、一一) 深谷、林、外一般班七名

○劔澤生治(七、一〇一七、一六) 小林、原田、林戸、佐野、清水
三ノ窓チンホ、クレオパトラ、ニードル八峯等を登る。

○針ノ木峠より五色ヶ原(七、一四一七、一六) 森、樋口
○五色ヶ原より徳澤へ(七、一九一七、二四) 深谷、山田、根本、

佐藤、林、森、小林、松下、原田、林戸、間々田、中林、樋口、佐野、清水、前田、細野、入澤

一行十六名、友田の追悼縦走なり。最初の計畫によれば、縦

走後濁澤及奥又白にて合宿の豫定なりしも、時局切迫の爲、學校當局より、運動部合宿中止の報を受け、爾後の計畫は一切取止む。何かしら肅然たる氣持の中に、縦走のみ遂行す。

十九日 晴後雨。五色ヶ原より薬師岳肩へ。途中、友田遭難地點を葬ふ。

二十日 晴後雨。太郎兵衛平小屋へ。

二十一日 雨、薬師澤を下りて爺父平へ。

二十二日 雨、滞在、夜中、増水の爲テント移動に大騒ぎする。

二十三日 雨。三俣蓮華小屋及双六小屋に分宿。

二十四日 晴、徳澤へ。徹底的に雨に叩かれた此の縦走、此の日の晴に有終の美を結ぶ。途中小槍に遊ぶ。

○五色ヶ原より針ノ木峠(七、一八一七、一九) 常盤部長、宮城、高野

○五色ヶ原より雄山(七、一八一七、一九) 桧淵、川村
○農鳥岳(八、七七八、一〇) 清水、大崎

お天氣悪く農鳥小屋に二日間閉ぢ籠められる。

○燕槍ヶ岳(八、二〇一八、二二) 佐野
○谷川岳(九、一五) 佐野

○燕槍ヶ岳(一〇、一五一〇、一九) 常盤部長、根本外二名
○奥又白(一〇、一七一〇、二二) 小林、高野、佐野、入澤新

雪の岩壁に暫し吊然、悲報來り急據廣瀬へ
○甲武信岳(一〇、一七) 前田、細野、古澤、長沼、大崎

三人遂に歸らず。詳細は本文参照ありたし。

○德 澤(一一、二二—一一、二五) 清水、入澤

德澤殘留品荷下

○冬山トレイニング

冬期合宿に備へ萬全のトレイニングを始む。

鋸 山(一一、三〇) 山田、桧淵、林、伯耆、樋口

御前山(一一、三〇) 根本、高野、清水、大崎

赤倉山(一一、三〇) 原田、濱口、堀本

黒 岳(一二、七) 小泉、高野、鈴木、間々田

大 岳(一二、七) 森、原田

海 澤(一二、七) 山田、桧淵、林、小林、伯耆

○與瀬より吉田へ(一二、二五—一二、二七) 高野、佐野

冬期合宿の實地踏査。

○槍ヶ岳(一二、二五—一二、三〇) 高野、小林、清水

お天氣良好、高野體の調子悪く、小林清水大槍に登る。

○赤倉温泉(一二、二〇—一二、三〇) 伯耆外一名

○關温泉(一二、二五—一二、三一) 林戸、間々田、中林、樋口

佐野外一名

○池ノ平、關温泉(一、五—一、八) 山田、根本、細野

池平に出來た學校の山寮を見に行く。

○八方尾根スキー合宿(二、二—三、二二七) 松下、原田、林戸、

濱口、間々田、伯耆、外一名

○槍ヶ岳(三、一二—三、二二) 根本、林、小林

小槍に登る積りであつたが、猛風の爲、肩迄行つて中止そのまゝ、學生生活最後の春山に陶醉してしまつた。

○第二班行事

棒ノ峯(二〇、一二) 根本、外第二班員九名

雲取、黒鷄冠山(二〇、二七—一〇、一八) 林外第二班員七名

日ノ出山(一一、二〇) 小泉外第二班員一名

乾徳山(一一、二三) 桧淵外第二班員四名

昭和十七年度一橋山岳部役員左の如く決定。

(本科) 代表 根本 大 班幹事 林 正敏

會計 小林 茂雄 庶務 高野 秀男

圖書 鈴木 肇 器具 松下 順吉

記録 林戸 茂男 食糧 原田 豊

(豫科) 代表 間々田 良雄 會計 中林 榮三

器具 伯耆 豊次 會計 柳澤 信治

(専門部) 代表 入澤 肇 會計 柳澤 信治

器具 細野 眞令

奥秩父遭難會計報告

收入之部

前田家より 三五〇・〇〇

長沼家より 三五〇・〇〇

古澤家より 三〇〇・〇〇

細野家より 一〇〇・〇〇

本部及個人立替金 一九五・四二

合計 一、二九五・四二

支出之部

現地支出金計

一、一八九・五七

(内譯) 宿泊料四一三・一五 謝禮合計三八八・〇〇〇 (警防團

三二五・〇〇〇 巡查部長二〇・〇〇〇 僧侶一〇・〇〇〇 青柳氏

一五・〇〇〇 發電所一〇・〇〇〇 鎌田氏八・〇〇〇) 食料品費

三九・〇〇一 別備人夫代一五・〇〇〇 通信費四四・五〇〇 交通費

一〇二・九五五 葬儀費一一四・四七(葬儀用具三二・四七 木炭

三一・二〇〇 石油一・〇〇〇 トロ使用料二・〇〇〇 酒代四〇・八〇

大工賃七・〇〇〇) 諸物品及雜費三六・五六 茶代三五・九三

本部支出金計 一〇五・八五

食料品其の他物品購入費 二九・三五 通信費 四二・九〇

筆墨料 五〇 告別式費 一〇・五〇 本部宅謝禮金

二〇・〇〇 交通費 二・六〇

合計 一、二九五・四二

奥秩父遭難會計係 (豫) 小林 茂 夫 (專) 鈴木 肇 (本) 久保孝一郎

名簿訂正 其(ノ)三

板垣與一先生 (新部長) 本郷區西片町十番地いノ五

電話小石川(85)三四八五番

(入營中)宮城 恭一君 (新會員) 商工省總務局總務課勤務

(入營中)深谷 光茂君 (新會員) 勸業銀行人事課勤務

(入營中)佐野 茂雄君 (新會員) 日本化成工業株瓦會社入社

清水 一郎君 (新會員) 東京芝浦電氣株式會社入社

以上四君共住所從前の通り

五十嵐數馬君 淀橋區下落合四丁目二〇一五へ轉居

(電話落合長崎三二六八番)

野村證券株式會社東京支店へ轉勤

(電話日本橋(24)二二六四番)

高見 要君 杉並區永福町一六五番地へ移轉

河相 薰君 大森區田園調布三ノ四〇三へ轉居

兼松商店東京支店(丸ノ内(23)二二三七)

渡邊 九郎君 海上ビル内三菱銀行丸ノ内支店へ轉勤

(電話丸ノ内(23)二一九一)

住所 神奈川縣大船田園一八〇ノ九に訂正

針葉樹會例會 五月二十二日(金) 於如水會館

出席者 板垣新部長(會員) 中川、吉澤(一)、鈴木、高見、增

山、小柳、林 (部員) 久保、松下

一昨年、昨年と二度に亘る遭難事件の爲、常盤部長は其の責任を一身にとられるに到つた。事件は全く部員並びにOB會員

達にあつたのであり、一同心から残念に思ひつゝ、御引留め申上げる術を知らなかつた。前部長の申残された御言葉の數々は

其の後部員達に良く徹底し、茲に一橋山岳部は更生するに至つた。此の時新に鍛鍊部長に御就任せられた板垣先生を新部長に

迎へる事が出来、部員一同並に會員一同誠に喜びに堪へないものがある。此の日會に御多忙中の先生をお迎へした。部員は折

柄、鹿島槍冷澤小舎合宿の爲來會する者が少かつたが、久保君より先生の紹介があり、先生よりは御丁寧な御挨拶を頂いた。

續いて中川君會員を代表し、今や新なる登山意識の下に、力強く活動し初めた部に先生をお迎へするの喜びを語り、又前回の

微を踏まざる様、會としても部員に對し相當に立入つた指導干涉も必要とあればしようし、何れにせよより積極的に導いて行

きたいと述べた。後、先生の南洋方面視察旅行のお話を中心に時局談に花が咲いた。